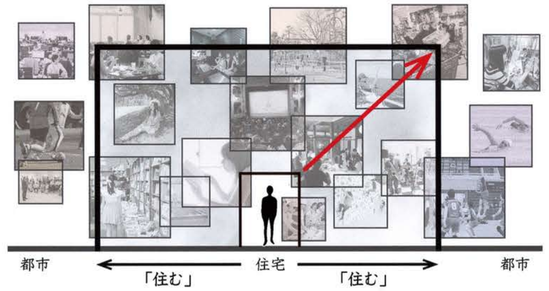
人とのつながりのない都会のマンションはなんだか寂しい
でもシェアハウスの人づきあいはめんどくさい
つながりたいけどつながりたくない
この住まいはそんなわがままをきいてくれる

3,000 人のシェアハウス

～ 僕たちは、ほしいつながりだけほしい ～

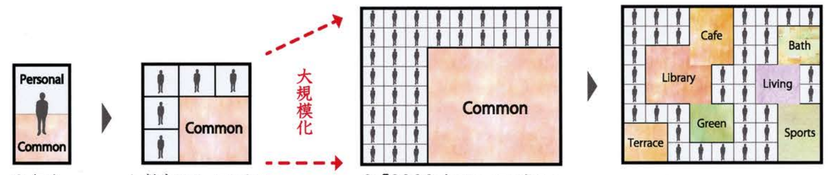
拡張された住宅は都市の快楽を内包する　Concept



はたして僕たちは、本当に「都市に住んでいる」と言えるのだろうか。都会にありふれたマンションは独立した個室の集積で人とのつながりがなくて寂しい。しかしシェアハウスの「つながらなくてはならない」強迫的なコミュニティは僕たちには億劫だ。だから僕たちは都市やネットにコミュニティを作り、「人が集まって暮らす快楽」を家の外に求めてきた。

今の住宅と都市の境界線から「住む」の領域を広げてみる。外にあった都市の快楽を内包した住宅は他者の存在を許容し、「つながり」に選択の余地を与えてくれる。

3,000 人の「赤の他人」を受け入れる大規模シェアハウス　Proposal

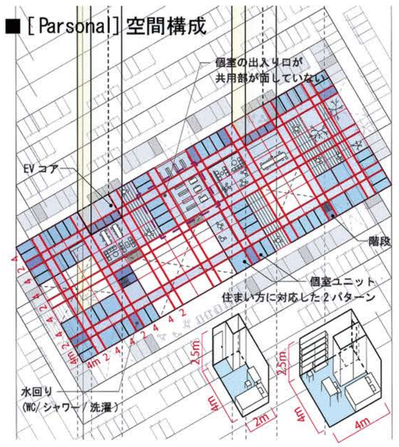


0. 個人　1. 従来のシェアハウス　2.「3000 人のシェアハウス」

完結していた個室を最低限のパーソナルスペースと共有できるコモンスペースに解体する。これを組み合わせて 3,000 人が住む大規模なシェアハウスへと拡大すると都市スケールの大きなコモンスペースができる。そこでは図書館や映画館、アリーナ、公園など、これまで都市の快楽として感じていた要素を住宅の一室として実現し、従来のシェアハウスにはなかった選択性のある都市的なコミュニティを生み出す。

多様な共用空間を生み出すシェアハウスのスケールメリット　Architecture

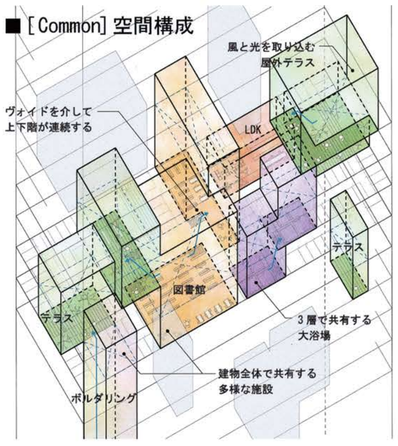
■ [Parsonal] 空間構成



ダブルグリッドが動線と構造を兼ねる。さらに諸室配置に自由度が生まれ、個室ユニットと共用部の間に距離感を与える。

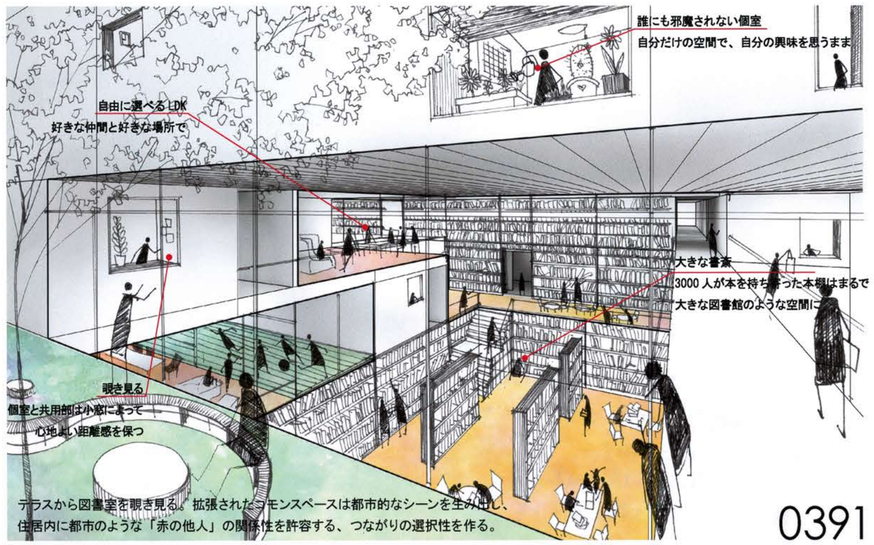
＋

■ [Common] 空間構成



規模を活かした多様な共用スペースは、視線や動線、風や光を連続させ、都市と個室を機能的にも空間的にもつないでいく。

自分の欲しいつながりを、欲しいときだけ、欲しい場所で　Image



テラスから図書室を覗き見る。拡張されたコモンスペースは都市的なシーンを生み出し、住居内に都市のような「赤の他人」の関係性を許容する、つながりの選択性を作る。